宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像
〒811-35 福岡県宗像郡玄海町
電話 0940-62-1311㈹
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
福岡店 福岡市博多区東公園二－三一（〒812）
電話 福岡（092）六五一－九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入（〒600）
電話 京都（075）三四二－三三四一番（代）
株式会社 井筒

アジア太平洋博覧会と宗像大社

宗像大社の神の島・沖ノ島の古代祭祀遺跡からの出土品が、いま〝よかトピア〟のテーマ館である福岡市博物館に、数多く展示されている。これは、往時の大和朝廷が対外交渉に際して、海上安全の願いをこめて宗像の神々に捧げた、供献品の品々であり、宗像大社がおまもりしている神宝類である。

福岡市は、アジア太平洋博覧会一色に染り変えられたような賑わいを、毎日みせている。

二十一世紀はアジアの時代だとも言われており、もうすぐ次の世代に手がとどくまでに近づいてきている。新時代の夜明けともなる平成元年を迎えたこの年、三月十七日から九月三日までの半年間、「新しい世界のであいを求めて」をテーマに、福岡市西区百道のシーサイドももちを会場として、アジア太平洋博覧会が開催されている。

福岡市は市制施行百周年を迎かえ、新たに「海に開かれた活力あるアジアの拠点都市づくり」をめざしていると言われている。この出発点でもあるこの年に、記念行事の一環として博覧会が行われているわけであるが、博覧会のテーマの中心とされているのが、「海を渡ってきた文化との出会い」である。そこの入り口の道標に位置しているのが、「古代の沖ノ島」であった。

会場には、汎太平洋オセアニアの諸国から文化・産業・風俗が持ち寄られている。これから先もアジアの時代の中心をなすのは日本であり、その玄関口は、古代からの役割として続いてきた福岡である。なお、一層拠点としての重要さを増すであろうが、今も一級灯台として燈が点されているように、航海上の標式は、神の島・沖ノ島」である。

博覧会々場シーサイドももちの入り口正面に位置する建て物が、新設された福岡市博物館である。この博物館は昨年の四月に開設され、アジア太平洋博覧会の導入部を受け持つ〝テーマ館〟として公開された。ここには、古代からの文化交流及び、新しい大陸文化を受け入れた古代の人々の姿をしのぶ各地からの文化財が、資料として数多く出品され、各時代ごとの展示により文化の変遷過程を標示している。

テーマ館が取り上げている標題は、「みち　であい」である。東と西の文化・物資が日本へと渡ってくる路は、シルクロードと名付けられ、古くから着目され各文化機関が取り上げ、研究され続けられている。

この道のすべての終着駅は日本である。「うみのみち」「りくのみち」が、古代から脈々と現代までつづき、ここにある。

館ではまず「はるかなる〝みち〟のであい」と題した五分間上映の映画で幕が開き、映像により展示物を見て、文化の進行と発展を脳裏に焼き付けている。

つづいて展示室では、

一、日本人のなりたち
二、大陸から日本へ・海がもたらしたもの
三、宗像大社沖ノ島―海の正倉院
四、海のみち
五、鴻臚館
六、韓国新安沖引揚げ文物展
七、中国陝西省唐代文物展
八、大英博物館中央アジア文物展

と、各コーナーごとに区分して展示している。

また、日本人のなりたちと生活の原点を、縄文人、弥生人の生活遺物で辿り、その発生状況から文明への進歩を導入部として、我国がいつの時代においても、海と陸の文化を受け入れてきたことを、各地の資料によりひもといている。このようにして、常に文化の混入をもとに発展してきた、日本文化の様子を見学者に問いかけている。

いかに福岡という所が、古代からいつの世でも対外文化の導入地として発展してきたか探求していくことを定義づけとしている。

宗像・沖ノ島は、古代の対外交流において、海上交通の道しるべの役割をはたしてきたことは、衆知のとおりである。

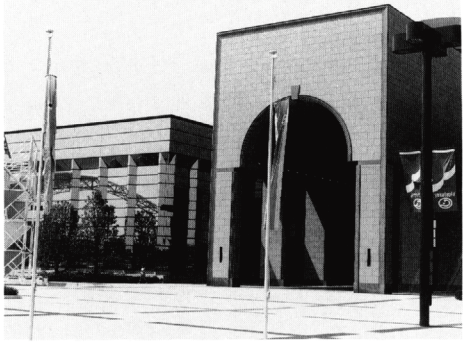
ここでは〝陸のロード〟と〝海のロード〟のまじわりがテーマとしてあつかわれているので、その接点の中心として、沖ノ島の出土品が展示されている。古代の日本の中心は大和地方であった。ここには当時の文化が華麗に花開いた都がある。洋の東西の文化が混在した賑わいをみせていたことだろう。それが藤原京・飛鳥京・平城京・平安京と多くの都が発達した文化で彩られ、現在も京都・奈良の地域文化として息づいている。

しかし、外国との交流の玄関は那ノ津（現在の福岡）であった。ここでは新しい風をいちはやく取り入れていたようだ。それを知らせてくれたのが鴻臚館址からの出土品である。ここは七世紀から十世紀までと短い期間ではあったが、中国唐代焼き物や中近東のカットグラス等、当時の生活と外国文化を知る手がかりが多く出土し、福岡の重要性と社会性を知る上での最高の遺跡ともいえよう。

沖ノ島は一般の生活文化とかかわりがなく、一線を画していると思われるが、古代の全ての道が福岡を通じていた時に、沖ノ島がその道標であった。いつも人は己の極限を神にもとめる。それは〝無〟の境地であり、無限の力を信じ、神へのひたむきな祈りがそこにあった。それが形として残されたのが沖ノ島の祭りであり、古代祭祀の跡である。今回この神祭りの跡が展覧会の中心としてあつかわれているのもその所以であろう。

文化を運んできてくれた船

沖ノ島神宝に注目する人々


福岡市博物館正面玄関

余滴

「常住座臥（ざが）」という言葉がある。座るにも、寝るにも、転じて日頃、日常の意に使われている。この座臥の座は正座、または安座（あぐら）の意で、畳上の起居の姿勢を示す文字であった。あったと書く理由は、座の意味が、今日では英語のシットダウン　座る、椅子に腰をおろす表現に変化した感があるからである。

小中学校の講堂で、生徒が床に腰をおろす際、尻を床に付け、前方へ両膝を立てて、両手でかかえ込む体育座りが普及している。現行の学校教育に正座はない。

正座が父兄にも敬遠される理由の一つに、足のスタイルが悪くなるという点が挙げられる。確かに毎日正座を長時間続ければ、脚の発育に影響があるかもしれない。当社で年二回、A社の中堅社員の研修が数日間行われるが、今迄座機会が少なかったので、正座が大変でしたとの感想を耳にする。入社間もないB社のOL、和室で食事の折、恰も刀の字を左へ倒した格好に、足を右脇へ投げ出して横座り、左肩を前に斜に構え、左肘を食卓に置いて食事を了えたという。近頃多数の若い女性が、和室ではこの様な姿勢で食事をすると聞き、改めて考えさせられた。現在、慶弔時以外に正座するのは、柔剣道等の武道、茶華道、古典芸能等の練習稽古の時、そして社寺の参詣がこれに続く。正座を躾として子供に教えない家庭も多い。和室では数分でも正座するのが当然である。正座の喪失と共に、美しい礼儀作法も又欠落しつつある狀況は、誠に残念な事である。

第三二四回　宗像大社歌会詠草

中村吾郎　選

毎月末日〆切

大島　屋形トミエ
不揃ひの鈴鳴らしつつ野花咲く小路ゆるゆると巡礼の列

（評）不揃いの鈴ならば鳴る音も違う筈。それぞれ鳴らしながら行く巡礼の列。一、二句は味わい深い。

田久　立花　勇雄
妻と行く最後の旅か瀬戸大橋渡る日をまつ八十二のわれは

（評）渡る狀態では歌になり難いが、待っている時点で詠んで成功した。それ故に作者の心が伝わる。

八幡西　山田　耕夕
妻の手を借らねば外出叶はざり道まで五段の階ははばみて

（評）「はばみて」と説明せず、「五段の石段上る」と具象したかった。そこが惜しまれる。

田熊　鷺頭かつ代
あすの日を待むにあらね塩はゆき食を抑へて生きんとぞする

吉留　白木うめの
吹き下ろす風にそそけ立つ藁積みの崩れ落ちたる幾つか見ゆる

小倉北　松木　政子
梅匂ふ峡を出づれば午後の日は遠く別府湾の上に傾く

中間　古賀アツ子
朝まだきわがゆく道に味噌汁の匂ひ流れて街は明けゆく

鐘崎　安永　久子
商ひの伝票に書く平成もよどまず昭和の日々に遠のく

名古屋　野崎　傳三
闇ふかき海の波間に彩りの定置網の浮子光またたく

八幡西　山田アヤ子
花大根うす紫の花に降る春雨しづか夕暮の畑

香椎　桜井　ツ子
端近く置けるメモ紙に歌をしるす草のあく染む軍手を脱ぎて

武丸　中村さつき
見つつゆく何処の庭も畑隅もラッパ水仙浮き立ちて咲く

戸畑　田中ハツセ
二トン車の重みにゆれてをりこのバス停は橋の上なり

福間　清原　絹代
御手洗の鉢に渡せる若竹の緑はぬれていよよ冴えたる

八幡東　江口　妙子
嬰児の瞳は澄め り四人目の孫を腕に抱き安けし

原町　八波　五月
英会話たしなむ嫁がホームステイの異国の子等を愛しみて置り

大島　目原　節子
海近き家にこもれば鷗らは降りつぐ雨に声冴えて啼く

池田　小田　イセ
春の土息づきくれば連翹の花こぼれ咲く庭の日溜り

八幡西　川崎　ウラ
孫泊りポケットの調べ怠れば団栗廻る洗濯機の中

八幡東　大塩ミヤ子
満開の櫻食むのかひよどりが枝渡りして花びら散らす

自由ヶ丘　後藤　君代
梅の葉に雫光れば目に見えぬ雨降りみると気づく明るさ

田熊　力丸　一郎
神苑の樟の大樹は芽吹き来て汚れなき葉に霧の雨降る

東郷　藤崎　辰子
濁り水湛えて荒く浪立てる川面の涯に菜の花盛る

八幡東　岡本　初音
如月の月に明るき庭池におどりし鯉の鱗が光る

武丸　立石ろせ乃
ランドセル三つ購ひ娘は孫らの新入学をよろこび悔む

皐月・浜宮祭斎行

神前に菖蒲酒・粽(ちまき)なども供え

神湊の浜宮、江口の皐月宮に於て、神郡宗像に初夏の訪れを告げる当大社恒例の、皐月・浜宮祭が五月五日厳粛裡に斎行された。

この祭は、古くは「五月会」と呼ばれ、秋の「放生会」と相並ぶ当大社の二大神事とされ、昔は、宗像三宮、織幡宮、許斐宮の五社の神輿が出て五月の神事が盛大に行われていた。

時代の推移と共に、次第にその様子も変わってきたが、祭りの精神は一貫して古より今日まで受け継がれ、毎年釣川を挟んで対する浜宮並びに皐月宮に於て、当大社と両宮の氏子住民挙げての祭典を行っているのである。

定刻十時浜宮に於て、養父宮司以下神職四名奉仕の下、和田玄海町長、梶木段天区長、松本第四分団長、神湊郵便局長、玄海小学校早川教頭外地元住民等約四十名の参列の中、浜宮祭斎行。

神前には、海川山野の神饌に加え、赤飯、菖蒲酒、粽・ガメの葉饅頭等が供えられた祭場で、段天区子供会代表の男女二名に合わせた子供達のほほえましい玉串拝礼を以て浜宮祭は滞りなく終了した。

祭典終了後、参道脇の相撲場に於て、恒例の奉納子供相撲大会が行われ、子供達の元気な声が五月の空に響き渡った。

引き続き、江口の皐月宮に祭場を移して十一時、豊福江口区長、辻八幡宮総代等多数参列の中皐月祭が斎行された。

祭典終了後、当大社五月寮に於て直会が催され、菖蒲酒の拝戴の後、方五寸の折敷に古式通りに盛られた独特の膳（赤飯の握り飯・がめ煮・なます等）を栗箸で戴き、神職、参列者共々和やかな雰囲気で一時を過ごした。

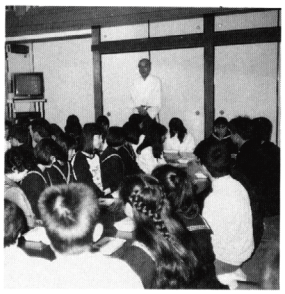
又、江口区の辻八幡宮境内にある皐月神社に於ても、地元総代等多数参列の下に正午より皐月祭が斎行された。

この皐月祭が終れば、神郡宗像は田植の準備が始まり、早苗が影を水田に浮べながら夏へと木々も緑を濃くしていく。

平成元年（第三十期生）宗像大社奨学金受給生奉告祭

新緑萌える四月二十九日（土）、平成元年度の宗像大社奨学金受給生奉告祭が本殿にて斎行された。

昨年までは、天長節に合せ、受給生は祭典に参列の後、儀式殿にて奉告祭が斎行されて来た。しかし、今年は



去る一月七日昭和天皇崩御遊ばされ、国民の悲しみの中、元号も昭和から平成へと変わり天長節も「みどりの日」として祝日に制定された為、奨学生奉告祭のみが斎行された。

午前十一時、拝殿には新奨学生二十名を始め、二・三年生の先輩達三十名が正座した。お祓を受け、祝詞が奏上され、新奨学生の入江穀君（玄海町）と上島美智子さん（福間町）の二人が代表として玉串を神前にうやうやしく捧げ、当大社奨学生としての自覚を持ち、勉学に勤しむことを誓った。

この奨学金制度は三十年前、昭和三十四年に、今上陛下の御成婚を記念して設けられた。三十五年四月二十九日の昭和天皇誕生日に第一期受給生に奨学金が渡されてより今年で三十期生を迎えたことになる。「民族伝承の美風を昂揚し郷土の人材育成に貢献する」を目的に設定されたこの制度の受給生も、第一期当時は宗像郡内六中学、六名であったが、三十年の歳月の流れの中で、現在は宗像郡・市内中学校十校、各校二名の推薦により、毎年二〇名の新受給生を迎えている。平成元年度で総数四〇〇名を数えるまでになった。全員の三ケ年の努力と健康をお祈りします。尚今年度受給生は次の通りです。

〔大島中学校〕
宮本　正（水産高校）
河辺　恵理（福岡商業）
〔玄海中学校〕
入江　穀（宗像高校）
嶺　浩史（香椎工業）
〔福間中学校〕
上島美智子（宗像高校）
志自岐加奈子（博女高）
〔城山中学校〕
藤井　正司（福岡高校）
田中　律子（香住丘高）
〔自由ヶ丘中学校〕
稲又由美子（光陵高校）
太田　美穂（香住丘高）
〔津屋崎中学校〕
嶋田　浩倫（九産大付）
漆原　努（香椎工業）
〔福間東中学校〕
今泉美江子（中村学園）
綾部　充（光陵高校）
〔日の里中学校〕
本石　正雄（福工大付）
赤塚いずみ（宗像高校）
〔中央中学校〕
宮崎　聖子（香椎高校）
松元　潤一（香椎工業）
〔河東中学校〕
桑原　志保（宗像高校）
中村　英樹（福岡第一）
以上二十名

国境線確定をソ連提案

昨年十二月の日ソ外相会談で設置が決まった「平和条約作業部会」の初会合が三月二十一日東京で開かれ、ソ連側は日ソ平和条約に盛りこむべき具体的内容の中に、これまで双方の立場が分かれている戦後の国境線を確定することを含む、と初めて北方領土問題に触れる提案をした。

周知のようにこれまでソ連は、日ソ間の領土問題はすべて「解決ずみ」で両国間に領土問題は「存在しない」との姿勢を押し通して現在に至っている。それが〝国境線確定〟という形で初めて領土問題を協議の舞台に乗せてきたわけだから、その意味ではあるいは問題の一歩前進といえるかもしれない。現に今回の会議を、一九五六年の日ソ共同宣言、七三年の田中・ブレジネフ会談に次ぐ第三の日ソ関係改善期と捉えている評論もあるようだが、果してそう楽観的に期待していいのかどうか、との感が深い。

○

ソ連提案の第一の問題点は、その国境線確定論に「戦後の」という条件のついていること。つまり第二次世界大戦後の国境線の確定というのだから、それが北方四島と北海道との間に国境を決める趣旨であることはまず間違いない。ソ連側のリガチョフ外務次官も「ヤルタ協定でソ連は、南部を含むクリル諸島を領有する権利を得た」と公言している。

ただリガチョフは、一九五六年の日ソ共同宣言にも言及しながら「戦後の国境がどこで線引きされるかについては双方の立場が分かれていてまだ決まっていない。その点についてソ連は決して硬直的に考えてはいず、日本との間で具体的に検討すべきだ」ともいっており、それは歯舞、色丹の二島だけのべている点は、もちろん基本的に重大な問題である。

第二次世界大戦にあたり米、英など連合国は、戦争による自国の利益追求や領土拡張を考えてはいないことを終始力説した。一九四一年の大西洋憲章や四三年のカイロ宣言はそのことを明記、ポツダム宣言もそのカイロ宣言条項の履行を掲げている。

しかし、この一般原則があるにもかかわらず米、英両国は、ソ連の対日参戦を求めるための代償として南樺太、千島列島のほか満洲等で日本が持っていた権益をソ連が取得することを認めた。一九四五年二月のヤルタ協定がそれだが、この三国間の秘密協定にもとづきソ連は対日戦に参加、しかも日本が降伏宣言して武力を棄てた八月十五日以後に千島列島に侵攻をはじめ、九月上旬に択捉以下の四島を占拠、一方的にソ連領に編入してしまった。

もちろん日本はサンフランシスコ講和会議を通して、北方四島は歴史的、地理的に日本固有の領土で平和条約にいう「千島列島」には含まれない、と繰り返し表明。この日本の主張はその後しだいに諸国にも認められて、米国は一九五六年、また英国も昨年八月、北方四島に対する日本の主権主張を支持するとの公式見解を明示した。

ヤルタ協定自体が秘密の約束で日本を拘束するものでない上に、その三国協定の当事者である米、英が協定の不当であったことを自認している今日、ソ連のみがその協定を根拠に領有権を主張することのいかに無意味であるかは、改めて説明の必要もあるまい。

○

ソ連が対日平和条約の早期締結を望んでいるのはもちろん、いま完全に行きづまりつつあるソ連経済の立て直しに日本の経済協力が欲しいからのこと。当然、ソ連の老獪な外交戦術を警戒することが肝要だが、同時に領土問題に関しては今日、米、英だけでなく諸国の間にも日本の主張を支持する国が確実に増えている。

平和条約作業部会は今後、五、七、九月と回をかさねることになっているが、日本の立場からせっかくのこの協議の場を有効に生かすことの必要であることはいうまでもない。

（神社新報より）

三十六歌仙扁額（六）楽松子宗像大社の「州信」印三十六歌仙図扁額

黒田泰三

豊国神社本は宗秀の個性とすべき磊落でのびやかさはあるが、やや雑な印象ものこる。兄永徳の豪放を継ぎ、ひいては桃山時代前期の時代性とも解される。

高台寺本は宗像大社本、多賀大社本同様慎重な線で、少し力の弱いこじんまりとまとまった感じがする。また、さきにみたように顔、手、足が全体に対して小さいということも考慮すると画史などに言う狩野光信の様式を思わせる。

（「丹青若木集」に光信についての記述の中で「人物の手足を小さく描くこと」とある）しかし秀吉像などの肖像画においてそれが威厳を表現しえているのと異なり、歌仙絵において顔、手、足を小さく描き身体の存在をことさら強調する様式は光信の描く肖像画の手法を踏襲し、様式化した弟子の手を予想させる。桃山時代後期の繊細さを好む時代の美意識を読みとることも可能である。

以上、諸本と比較すると宗像大社本は、最も古い例である永禄十二年（一五六九）作とも考えられる伝光信筆の高台寺本の抑揚のある描線とは同じ系統であるが、それほど様式化されてはいないとみてよい。

このように三作例と比較しながら宗像大社本をそれらの中で位置付けると次のようになる。宗像大社本は多賀大社本の筆者、おそらく松栄の作風の系譜をひき、伝光信筆の高台寺本の様式化まで時代は下らない。そして、宗像大社本のもつゆったりとした雰囲気は多賀大社本の画風に共通しているので豊国神社本より古様とみなせるのである。

歌仙絵　藤原興風図　福岡　宗像大社蔵

挿図11　藤原興風図　多賀大社蔵

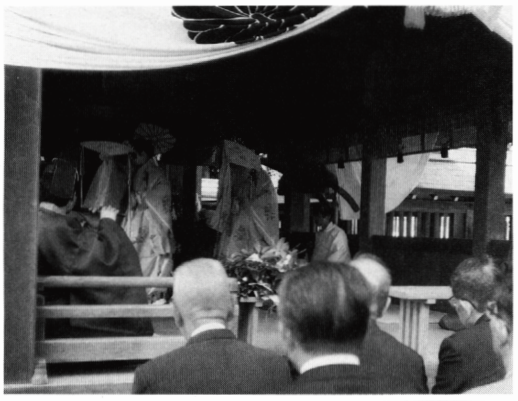
挿図12　藤原興風図　狩野宗秀筆　豊国神社蔵

（以下は、次号へつづく）

☆　☆

沖・中両宮春季大祭

―島民あげての神賑い―



群青の海と、新緑の山々が鮮やかな、大島と沖ノ島の二つの離島からなる大島村、その筑前大島に於て、宗像大社沖津宮並中津宮の春季大祭が去る四月十九日と二十日の両日に亘り盛大に執り行われた。

この大祭は、例年旧暦の三月十四日と十五日に斎行されるので毎年月日が異なっている。

大祭の諸準備には、沖・中両宮奉賛会々員、翼賛会々員皆様方の御奉仕をいただき完了、午後三時、掃き清められた境内で地主祭を斎行、午後五時、奉仕員は二手に分かれて、大島北側にある沖津宮遙拝所と中津宮に於て、宵宮祭が斎行された。

午前十一時、中津宮本殿取り遺族の方へお返しすることにした。この美枝子さんの英霊に又故国に対する尊い崇拝と思慕の念が、今年四月初旬中村さんの下に送られて来た遺品の国旗の中に込められている。

送られて来た国旗には、「祈武運長久　阪口義清君」同　平塚林蔵君」「同　郷野徳一郎君」「祝入営　栄照雄君」としたためてある。中村さんは遺族の方々を捜す為、地元記者への協力依頼等あらゆる手段を尽され、阪口義清さんが所持していた国旗には、菱木神社の朱印が捺印されていた為、地元記者より当社へ問い合せがあり、調査の結果、大阪府堺市に同神社が鎮座していることが判明、早速同神社へ連絡をとろうとしたが宮司不在の神社だった為、同地の古老の方にうかがったところ、阪口さんの両親はすでに他界していたが、従妹の阪口照子さんが大阪市東成区神落に住んでいることが判明、直ちに阪口照子さんへ電話で連絡したところ、余りに突然のことで驚き、「子供の頃よく義清兄ちゃんに遊んでもらいました」と絶句、中村さん兄弟の善意に何度も何度もお礼を述べられたそうである。

又平塚林蔵さんの国旗には、宮城県桃生郡と出身地らしき地名があったことと大忍寺の協力で、宮城県牡鹿郡牡鹿町泊浜に弟の平塚林之助さんが、栄照雄さんの国旗には、肥後姓、伊集院姓の署名があることから九州南部の出身ではと考えられ、中村さんが勤務されてる郵便局の同僚等の協力で、鹿児島県大島郡笠利町万屋に弟の栄辰次さんが、それぞれ健在でいることがわかった。

残った一枚の郷野徳一郎さんの遺族の方が現在どうしてもわからず、中村さんとしても一生懸命手掛りを求めておられるが、「何とかしてこの国旗をお返ししたいが、八方手を尽してもわからない時は靖国神社に奉納しようと思います」と語っておられる。読者の皆様でもし手掛りをしたいと手掛りを求めておられる。

今回中村さんの下へ届いた国旗は、医師である美枝子さんの夫が骨董品の収集家である為、州内各地で開催されるオークションや骨董品店に夫婦でよく出掛けており、その際に買い取ったものである。米国では元日本兵の刀剣・銃・国旗・軍艦旗等がマニアの間では人気があり、よく店頭で見かけたりオークションの対象になっているという。この現状を目にした美枝子さんは、大東亜戦争で国家の為に尊い命を散華された元日本兵のことを、又遺族の方々の心情を思うと、骨董品店の店頭やオークション会場でさらしものようになっている遺品をどうしても見過ごすことが出来ず、昨年八月頃中村さんと相談して、元日本軍兵士の慰霊の意味でもこの遺品を買いた。

沖津宮遙拝所は、大島の北西五十キロ離れた海上にある沖ノ島を遙拝する為に建てられた拝殿である。

四月二十日、午前八時三十分より大島東側宮崎区の小高い丘に鎮座する末社厳島神社でも春祭りが行われ、今年の大漁・海上安全が祈願された。

午前九時、沖津宮遙拝所に於て春季大祭を斎行、玄界灘遙か沖にある沖ノ島に鎮座する沖津宮へ神饌が供えられ、宮司の祝詞奉上、巫女による「浦安舞」と続き、祭員並参列者玉串拝礼を行い祭典を終了した。

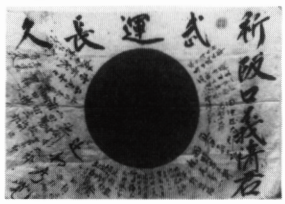
午前九時半、大島村最高峰の御嶽山々頂に鎮座する御嶽宮に於て春祭りが斎行された。

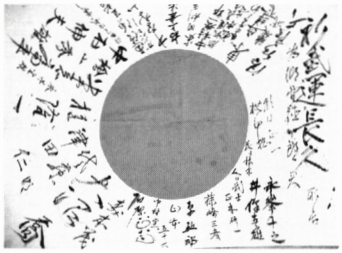
午前十一時、中津宮本殿に於て春季大祭が執り行われた。本殿には、大島の各漁船から新鮮な海の幸が供えられ、沖・中両宮奉賛会々長、大島村々長を始め、関係者多数参列のもと太鼓の合図で祭典が開始され、宮司の祝詞奉上に続き、村民を代表し氏子奉幣使として、丸井房芳氏の奉幣詞奉上、次に十二単衣に正装した巫女二名によって「浦安の舞」が舞われ、つづいて玉串拝礼が行われ、参列者一同玉串を供え敬虔な祈りを捧げた。引続き、感謝状の贈呈が行われ、御高齢にもかかわらず、長年に亘り沖・中両宮奉賛会に御尽力下された、田志大吉氏、沖西辨蔵氏、遠藤沖ノ助氏、三名に宮司より感謝状及記念品が贈呈され、春季大祭は、滞りなく終了した。

元日本軍兵士の国旗里帰り

宗像大社がとりもつ縁

宗像市原町の中村秀明さん（48・宗像東郵便局主任）の下へ、米国テネシー州ジョンソン市在住の中村さんの妹、美枝子さん（40）から、元日本兵の遺品である寄せ書きの国旗四枚が届き、内三枚は遺族の方々が判明、それぞれ中村さんより手渡されたが、内一枚はまだ判明せず、何とかしてお返し





新人紹介

宇都宮（うつのみや）　勤（つとむ）

昭和二十八年田川市に生まれましたが、生後まもなく父の宗像大社奉職と共に、宗像に移り高校までを過ごしました。高校卒業と同時に国学院大学へ進み、五十一年春には奈良春日大社へ奉職、在職中舞楽・雅楽・大和舞等を学びましたが、その間大病に罹り残念ながら五年後に退職しました。その後博多住吉神社、津屋崎年毛神社にご奉仕し、今年四月幼い頃より庭の様にして遊び親しんで来ました、念願のお社にご奉仕することが出来ました。

素より浅学菲才に加え若輩者ですが誠心誠意、神明奉仕に励み、微力ながら御神威の発揚に全力を尽す覚悟でございます。

今後は皆様方のご指導ご支援を賜わり僅かなりとも斯道のお役に立てるよう精進致します。

また小学校一年の時より父の指導の下、続けて来ました剣道の経験を生かし、玄海少年剣道の指導者として、週三日、青少年育成の為奉仕しています。

趣味として、木製の帆船模型同行会（ザ・ローブ九州）に所属、現在まで十五隻を完成し、年一回の展示会にも欠かさず出品しているほどのキチガイです。

葦津（あしづ）　幹之（もとゆき）

此の度、四月一日付を以まして宗像大社に奉職させていただく事になりました葦津幹之です。昭和四十一年にここ宗像の地で生を受けましたが小学三年の時、家庭の事情により、この風光明媚な玄海の里をあとにしました。

以来実家稲崎で成長しましたが代々受け継がれた神職の道をめざすべく、伊勢の皇学館大学へと進学致しました。今般同校を卒業と共に、ふる里の神都宗像で念願の宗像大社に奉仕が叶うこととなり私にとりまして本当に大きな喜びであります。

毎日の神勤は早朝の境内清掃から始まります。神職一年生にとりまして日々神明奉仕が新たな体験と発見ですが、神職としての基礎だけはしっかりと学びたいと思います。

スタートしたばかりでこの先長い長い道のりになると思いますが先輩神職の御教示を仰ぎ、職員の皆様、氏子崇敬者の皆様から信頼される神職像をめざしてがんばりたいと思います。

王子神社春祭

当大社春季大祭も無事終了した翌四月三日、王子神社例祭が斎行された。

王子神社は、宗像市王丸にそびえる許斐山（標高二七一米）の頂に鎮座する境外摂社である。

御祭神は素盞嗚命で、例祭日の三日には、毎年当大社神職が祭典を奉仕している。当日は麓の熊野神社でも祭典が斎行されるので、王丸区長を始め関係者は二組に分かれ参列した。

例年になく暖かい上に、好天にも恵まれ、山頂に着く頃には軽く汗ばむ程であった。

社殿は石の祠で、その前に神饌をお供えし祭典が斎行された。参列者数名という質素なものであったが、一名ずつ玉串を奉り、神前に敬虔な祈りを捧げた。

祭典終了後一同下山し、当番の区長宅に於て両祭典に参列いただいた関係者合同の直会が催され、和やかな中に本年の例祭も無事終了した。

社務日誌抄

四月一日～二日　宗像大社春季大祭

献上若布収取功労者・大太鼓奉納桜井洋氏表彰式

四月二日　交通安全講社祭　宗像護国神社春季大祭

四月三日　奉納剣道大会　王子神社祭

四月四日　箱崎四十四賀戊亥会一　福岡シティー銀行日の里支店長佐伯利恭氏転任挨拶の為来社　古文書編纂委員会　六〇名参拝　神湊西戌会十五名参拝

四月五日　北九州市歴史博物館有川氏来社　宗像土木事務所長小山峻氏着任・同前所長石塚守氏退任挨拶の為来社　福岡県流域下水道事務所長森山利彦氏来社

四月六日　若松区第一港友会十社参拝　玄海町団参千人参り参拝

四月七日　宗像大社氏子会会計監査　福岡県中小企業経営者協会六十名参拝　交通安全キャンペーン於宗像市

四月八日　九州大学川添昭二氏・便利堂吉見氏来社

四月九日　神湊巳午会二十二名参拝

四月十日　出光興産㈱福岡支店総務課長橋本敦男氏・同松本氏来社

四月十一日　大島中学校遠足三十名来社　城山中学校遠足九〇〇名来社

四月十二日　静岡県立美術館学芸員田中氏来社　中央中学校遠足六〇〇名来社　池田地区同年講十六名参拝

四月十三日　福岡教育大学事務局長大泊毅氏着任挨拶の為来社

四月十四日　東京都鉄砲洲稲荷神社宮司中川正光氏外三十八名参拝　出光バルクターミナル㈱宗像神社鎮座祭・太田禰宜外三名出向奉仕

四月十五日　月次祭　出光バルクターミナル㈱宗像神社鎮座奉祝祭　奉仕者前記神職

出光エンジニアリング㈱兵庫事業所長河野東洋氏・同保全課長浜部綱彦氏参拝　地元総代・協力会並神社職員懇談会

四月十六日　織幡神社春祭

四月十八日　出光興産㈱社長出光昭介氏夫妻・ポルトガル グルベンキャン氏夫妻・同海外部長出光昭氏夫妻外四名参拝

四月十九日　福岡市博物館学芸員米倉氏アジア太平洋博出陳神宝返却の為来社　㈱原考古学研究所岡研究員来社　福岡県立水産高校遠足五〇〇名来社

四月二十日　沖・中両宮春季大祭　出光興産㈱門司油槽所宗像神社春祭・太田禰宜外神職二名出向奉仕　北海道光運会長川田清氏外十三社参拝　出光興産㈱高松支店長松田眞市氏外四名・四国光運会四社参拝　福岡県消防学校新入生六十三名参拝

四月二十三日　氏八満宮神幸祭

四月二十四日　KBCテレビ「モーニング・モーニング」取材

四月二十五日　出光興産㈱店主室教育研修開始

四月二十七日　第七管区海上保安本部梶山寿氏・戸上洋次郎氏・樋口隆利氏来社　六條家々職高橋宏氏外一名参拝

四月二十八日　出光興産㈱店主室教育研修終了

四月二十九日　宗像大社奨学金受給生奉告祭

宗像大社歌会 俳句作品集(三四)

藤沢　井上　玄洋

噺りの流れて匂う浜寶垣

田熊　安部　ゆき

思い出の深き道なり山椿

津屋崎　井浦　良介

平成の花降る宮の静けさに

福間　広渡一寿軒

磯馴れの松の雫や丸きのこ

日の里　花田いつえ

春先に結ぶ初着の肩の紐

福岡中央　力丸　玄風

花忌日一会の出会ひ惜しみけり

福間　森　清

魚を売る友頬被りして老いぬ

田熊　力丸　一郎

ビル成れり四階仰ぐ春の空

津屋崎　西住喜三郎

爽やかに席ゆずられて花疲れ

滋賀　岩瀬　辰夫

座して観る庭の牡丹や茶の香り

(続) 浜の寄物 36

また横道にそれて (一)

いしいただし

見学者の列がつづく

寄物の話からそれて、いま話題の吉野ケ里遺跡について記したい。

昨年から今年と、鴻臚館、藤ノ木古墳、そして吉野ケ里遺跡と、考古学の話題にことかかない有様である。

四月九日、福間町郷土史会のお伴をして、その佐賀県神崎郡神崎町(一部三田川町)にまたがる)吉野ケ里遺跡を巡ってきた。

前日の八日は、福岡市博多区にある金隈資料館(金隈遺跡から甕棺三四八基、石棺墓二基、土拡墓一一九基が発掘され、うち甕棺墓九一基、土拡墓三四基、人骨三体を、覆屋をして、発掘そのままの状態で展示している)を見学、館の中原志外顕氏の説明をきき、しっかりと、この時代を頭に入れて吉野ケ里遺跡へのぞんだ。

宿泊地の武雄温泉を早目に出発したが、多分、早い方が見学者も少なく、あと墳丘墓出土の把頭飾付有柄銅剣や、ガラス製管玉類が佐賀県立博物館に展示されているため、そちらにも寄らなければならなかったからである。

遺跡地に近づくと、車がふえはじめ、道路、そして畑地の小路や水田の畦に、人の列がつづいている。吉野ケ里へと草木もなびくではないが、見学者の群れで、もう遺跡周辺は人車で混雑していた。

ここを訪ねたある考古学者は「吉野ケ里は興奮の坩堝(るつぼ)と化している」と書いていたが、当日は、まさにこの通りであった。晴天にめぐまれ、今迄の最高の人出で、四万五千と発表されていた。(その一週間後の十六日(日曜日)には五万八千人と記録を更新し、連休の五月三日には六万人という人出であった)

遺跡は、神崎工業団地として開発するため、吉野ケ里の丘陵地、長さ南北二キロ、東西六百メートルの、約六五ヘクタールを造成するもので、その造成前に、佐賀県文化課が、昭和六一年五月以来、発掘調査をすすめてきた。

もともと、吉野ケ里周辺の丘陵地は、佐賀県内でも、有数の遺跡地帯で、私も二十数年前に歩いたことがある。その時にも、弥生時代の甕棺や土器片は、いたるところで見たことを思い出す。昭和五四年十月に、佐賀県立博物館で「鏡・玉・剣」展にも、吉野ケ里出土の細形銅剣が展示されていたし、周辺の町からも、把頭飾品などが出土している。

ここは幸いにも丘陵地全体が、比較的人家が少なく、丘陵地全域がまとまって調査が行われ、遺跡の全容をつかむことが出来たのである。位置もよく、広い丘陵地は生活条件に満たされて、古くから人々が住んでいた。発掘調査によって、先土器時代、縄文時代の遺物も発掘されている。中心はなんといっても弥生時代の中後期で、その後、古墳時代、律令時代、平安、戦国と各時代にまたがる複合遺跡である。

弥生時代の竪穴住居跡は約三百五十軒、甕棺墓や土拡墓などは二千三百五十基で、うち二千基が弥生時代のもの、甕棺から約三百体の人骨も発掘されている。

丘陵地には、弥生時代の各期の環濠があり、そこに集落が形成され、後期には四ケ所の物見ヤグラや、高床式倉庫群二十棟以上が確認されている。長さ四十米の墳丘墓の甕棺内には銅剣・ガラス製管玉を副葬し、吉野ケ里のトップクラス級が埋葬されている。

墳丘墓の北側には、奈良時代の掘立柱も二五十棟、官道、郡衙跡などもある。

遺跡は発掘が開始されて三年を経過し、竪穴の一部は草がはえたり、崩壊しているところもあり、長い発掘の年月を語っている。

次回は、それぞれの跡をたどってみよう。

奈良時代の国道もある

まつりと生活 (三十四)

遷宮の意義について

神宮では二十年ごとに、すべての社殿をそっくりそのままに造り替えて、神座を遷します。これを遷宮と言います。二十年に一度行われることから「式年遷宮」の名称で知られ、臨時に行われる臨時遷宮や仮殿遷宮に対して正遷宮とも言われます。最近では昭和四十八年十月に第六十回遷宮祭が行われました。正殿以下多くの殿舎が造営されるので関連諸祭は八年前から始まります。その最初の祭りは山口祭・木本祭と称し、造営のための御用材を伐り出す祭りです。御用材を伐り出す山を御杣山(みそまやま)と言います。また、木本祭は両宮の「心御柱」の御用材を伐るにあたって、その木の本に坐す神を祀る祭りです。その他遷宮関係の諸祭は三十余りにのぼります。次回平成五年に行われる第六十一回遷宮祭は、すでに天皇陛下の御治定を仰ぎ、今その準備が着々と進められています。

この式年遷宮の制度は、飛鳥時代に天武天皇の思召しによって定められ、次の持統天皇の四年(六九〇)に皇大神宮、同六年に豊受大神宮の第一回の式年遷宮が行われました。それ以来、中世の内乱の時期に一時、中絶しましたが、慶光院清順上人らの努力によって遷宮が再興され、昭和四十八年の第六十回式年遷宮まで、千三百年にわたってこの伝統が固く守られています。

遷宮では、神殿の敷地をかえ、神殿を新しく建て替え、その中の御装束・神宝から御調度品まですべてを新しくととのえ、大神のお遷りを願い、その年の神嘗祭が奉仕されます。

御装束とは、衣服や服飾品、御神座や殿内の舗設品、服飾品、遷御の儀に用いる品々を言います。神宝は、神々の御用に供する調度品で、紡績具、武器・武具、馬具、楽器、文具、日常用品の類いです。これらの調度類は、二十年間正殿にお納めして神用に供したのち次回の遷宮で撤下します。それらは、二十年目毎に確実に調製されることによって、日本の伝統的な技術が上代より今日まで脈々と伝わっているのです。

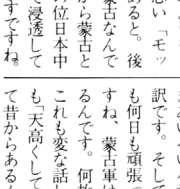
二十年に一度、新しく造営するというのは、種々の説がありますが、社殿の朽損という建築上の問題、また技術者の世代の交替の上から極めて適切な年数であることは確かです。

二十年という年数は、一般的に言えば、大きな折目節目であると言えます。その折目であると言える二十年という周期に際して行われる式年遷宮祭を通して、伊勢の大神と国民の新たなる生命を甦らせることにあると言えます。新嘗祭が天皇の霊威の更新、神嘗祭は皇祖の大御神の神威の更新であり、大嘗祭が御即位後初めての新嘗祭で、天皇がはじめて皇祖神と御一体になられる御儀と同様であります。

このように神宮の遷宮は、二十年毎に繰り返すことによって、御正殿を始め、全てが新しく甦り、皇祖天照大神の新たな御神威を授かることで、我国の活力を再生することなのです。それが万世一系の皇室を戴く日本の生命を永遠に維持していくことなのです。

遷宮は、祖型を反復することによって常に初心に還らせ、心新たに明日への希望と活力の源泉となるものです。もっとも古い伝統を保持しながら、しかも、もっとも清新な生命の再生を図るものとして繰り返されてきた、民俗の営みであり、生命観であります。

Y・S記

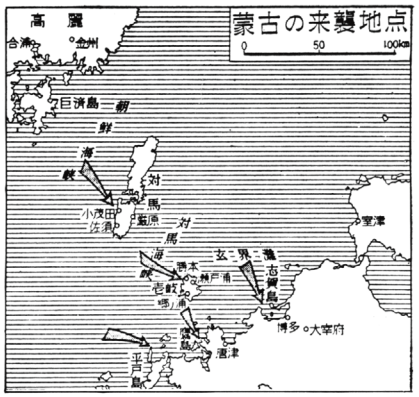


RKB文化セミナー

日本のこころを尋ねて むなかたの海辺と杜(もり)に (六)

渡部　昇一

それでさあ元寇が来た。大変だと日本中が大騒ぎですね。どの位騒いだかと言いますと、まあこの辺が騒いだのはわかりますよ。私の所は先祖代々山形県なんです。八幡太郎が蝦夷征伐した時の脱走兵かなんかの子孫ですから、ところが私が子供の時、家のお婆さんが、家のお婆さんは小さい時に稲で目を突いて、ちょっと目を悪くして本なんか読めない。だから本から入った知識でなく自分のお婆さんからまた聞いたような話だろうと思うんですが、私に話して、世の中で恐いものは何があるかと言う訳ですよ。幽霊だ、何とかかんとかこっちは言う訳です。いや違うもっと恐いものがある。ライオン、いやもっと恐いもの。で結局答えはですね、「モッコ」だと言うんです。「モッコ」で何んだと言ったら、それは、モコーッとした「モッコ」だと言うんです。何んだろうと。言われてみると「モッコ」だと言われると恐いんですよ。幽霊だとか、狸だとか、狐だとかそんなものよりも、もっとずうっと恐い「モッコ」というのがあると。後から考えたら、蒙古なんですねあれは。だから蒙古というものが、どの位日本中に恐いものとして浸透していたかがわかりますですね。



ところが、相模太郎は"胆神の如し"であって、鎌倉に座ったままびくともしない訳です。しかし日本中の武士は、さあ大変だどうしたらいいだろうと、大元百万の軍が来ると、こう言う訳ですね。それで武士の一番頭である北条時宗の所に行く訳です。そうすると、まだ年は若いけれど端然と胡座をかいたまま、少しも恐れる風がない。それでいろんな武士が時宗に会うと、もう電気に触れたように勇気が湧いた訳です。やれるという訳です。それで元寇の役に勝った訳ですよ。

元寇の役は神風で勝ったことになりますけれど、神風だってそうしょっちゅう吹いてくれる訳じゃなく、それは上陸もしてるしまあいろいろ頑張っておる訳です。そして上陸されても何日も頑張っておればですね、蒙古軍は必ず秋に来るんです。何故かと言うとこれも変な話しですけれども「天高くして馬肥える」って昔からあるんですね。だから蒙古の兵隊といえば、天高くして馬肥える時に戦争すると言う習慣があるから、それを日本にも応用して、天高くして馬肥える時に来る訳です。そういう時にこの辺の海に何日もふらふらしてたら、必ず暴風雨の一回や二回は来る訳ですね。それが、日本軍が守らなければ、意気地無しであればすぅーっと上陸するけれども、なかなか頑張って奥地に入り込まれないから、せいぜい海岸にちょっとへばり付いて、船はだいぶん沖に置いただけであるという時に、そして一週間経ち、二週間経ち、半月、一月経てばその内暴風雨の一回や二回は来る。とこういうことなんですね。

だからあれは、全く北条幕府の力だと私は思います。まあ強いて言えば、時宗のじたばたしない、じたばたしてここに指揮に来るなんていうこともしない、鎌倉に座ったままでですね、それに、あそこに座っているという、相模太郎が座っているというだけで皆を奮い起たせるだけの力があった訳です。

というようなことで武家時代はずぅーっと続く訳です。

次号へつづく